

米国における河川の自然環境研修

独立行政法人土木研究所水循環研究グループ河川生態チーム 萱場祐一



2000年11月～2001年10月米国滞在中に幾つかの河川の自然環境に関する研修を受けてきました。本報ではその中から“Stream Corridor Restoration”という4泊5日の研修を取り上げ、その様子や内容を紹介したいと思います。この研修は、米国の“Fish & Wildlife Service”が米国東部のペンシルバニア州に建設した研修所で実施している研修の一つで、他にも野生生物に関する様々な研修を受けることができます(他の研修については、ホームページ <http://www.nctc.fws.gov/index.html>を参照してください。本当にいろいろな研修があります)。研修は誰でも受講料さえ払えば参加できます。私が受けた研修も政府関係者、NPO、民間コンサルタントの方と様々な顔ぶれから構成され、受講料は一般の人は確か800USドル程度だったと記憶しています。さて、講習の内容ですが、そもそも、Stream Corridor(コリドー、「回廊」と訳される場合がある)とは、川とそこに隣接して広がる氾濫原、そして、氾濫原に隣接する山々のスロープを含めた概念で、日本には適当な語訳がありません。ここでは、ストリームコリドーとそのまかたカナ読みしておきます。講習は、1冊の分厚いテキストブックを中心に進められました。このテキストは米国の様々な機関が連携して取りまとめた教科書で、ストリームコリドーの概念、関連する水文・水理・地形・生物・水質等の基本的な事項、具体的な復元工法、そして、実際に復元事業を実施する際に適当な組織論や予算の確保まで様々な内容が含ま

れています。各分野の既往の知見をよくレビューし上手に取りまとめているから、日本でも大いに参考になる資料だと思いました。実際の研修は、7割程度が講義、2割がグループに割り当てられた宿題のディスカッション、1割が復元事業を実施しているサイト視察、といった割合で行われました。日本の講義と異なる点は、5人程度の講師陣が研修中に全ての講義を研修生と共に聴講している点です。説明が不適切であったり、内容が不十分であったりすると研修生の背後にスタンバイしている講師陣がすかさず補足の説明をしてくれます。講師陣を長期間拘束する必要から、ストリームコリドーに関する高度な専門知識を有する超一流の講師陣を揃えることはできませんが、その代わりに、広範囲な内容を短い時間でバランスよく講義するプログラムとこれを実施するための講師陣に対する十分な訓練が、能率的な研修を可能にしているようです。4泊5日という短い時間ですから、ストリームコリドーに関する全ての知識を習得することは不可能ですが、ストリームコリドーの復元に必要な用語や概念等を様々な人たちの中で共有するという目的は十分達成されているように思えました。

米国では、このような政府機関による研修だけでなく、民間コンサルタントも自前で研修を実施している場合が少なくないようです。今回のコラムではこの一事例として、コロラドのスキーリゾートシルバースオンで受講した河道地形学の研修について報告したいと思います。

特集の内容をさらに身近に体験してもらうために、関連施設の展示を紹介します。

展示見聞録

水位を調整して維持される水辺環境で野鳥を観察

山口県立きらら浜自然観察公園

「観察ホール」

きらら浜自然観察公園(山口県吉敷郡阿知須町)のある場所は、シベリアやカムチャツカから日本列島を縦断し東南アジアへ向かう渡り鳥たちと、モンゴルや中国から朝鮮半島を経由して四国・九州へ横断する野鳥たちの交差する位置(クロスロード)にあたります。30ヘクタールの広大な園内には、野鳥を中心とした様々な生き物を観察できるビジターセンターを拠点に、その周囲に「干潟」「汽水池」「淡水池」「ヨシ原」「樹林地」という5つの自然環境が創出されています。これらの自然環境を見渡せるビジターセンターの「観察ホール」には、子供連れの家族を中心に、幅広い層の人たちが見学に訪れます。ここには30台のフィールドスコープ(望遠鏡)が設置され、多くの人たちが椅子に座ってゆったりと自然観察を楽しむことができます。この施設では、これまでに141種類もの野鳥が観察されているそうです。10月は渡り鳥のシーズンで、園内のヨシ原では夕方になると、南の国へ渡る途中のツバメ、ショウドツバメ、数千から1万羽がねぐらを作ります。ヒタキ、ヨシキリ、ノゴマなどの小鳥たちも次々と渡っていくそうです。観察のポイントは常駐するレンジャーが日頃の調査・研究の結果をもとに詳しく説明してくれます。チーフレンジャーの原田量介さんは、「11月からは冬鳥のカモたちが主役になります。渡ってきたカモのオスたちがきれいな繁殖羽に変身する時期です。カモの中でもひととき注目されるのは公園のマスコットにもなっているトモエガモで、近年、生息数が減っているため何羽やってくるか楽しみです。」と、これからの時期の観察ポイントを教えてくださいました。

このような水辺の自然環境を良好な状態に保持するためには、やはり水位の変動が鍵となります。園内の「干潟」「汽水池」の環

境は、海に繋がる水門を開閉し、海水の流入量を調整することで維持されています。わが国にはいくつかの野鳥観察の拠点がありますが、このように動的な空間を大規模に創出し、そこを観察場として活用している場所は他にありません。人の手を加えて創り出す環境が、多くの生き物に利用されながらどのように変化していくのか、自然環境の保全・復元の視点からもこの施設の今後の注目がされます。

[吉富友哉(独立行政法人土木研究所水循環研究グループ河川生態チーム)]



ビジターセンターでは水辺の様々な環境を一望できる。



フィールドスコープを使って干潟の生物を観察。



きらら浜自然観察公園全体(配置図)(パンフレットより転載)